【勤務参考】46　　１５．１０．１５

技術開発官（船舶）

「軍艦行進曲」（その１）

（読売新聞日曜版；浅見恭弘氏著述から）

１９５１年（昭和２６年）の春先。東京・有楽町の駅前にはまだ、バラック造りの店がひしめいていた。

サンフランシスコ講和条約の調印より前である。都心の繁華街にも進駐軍の兵隊が大勢いて、日本女性と腕を組んで歩く姿も目につく。

「面白くねえな。」・・・・。海軍出身で当時３０歳そこそこ。駅近くにパチンコ店「メトロ」を開業したばかりの田中友治（現在８２歳）は、舌を打った。

米英との開戦直後のマレー沖海戦に「９６式陸上攻撃機」に搭乗して参戦、以後、様々な戦闘に参加した。終戦直後はパージで働き口がなくて苦しんだが、バラックで始めた時計の修繕が成功した。知己の助けもあり、流行りだしたパチンコ業界に進出した。

かつての敵への反骨心を込め、店にあった『軍艦マーチ』のレコードをフルボリュームで、しかも、わざと拡声器を店の外に向けて、ガンガン鳴らしてみた。大戦中、戦果を挙げたニュースの時に流されたおなじみの曲だし、調子がいい。通行人たちも嬉しそうだった。

だが、丸の内警察署から「待った」がかかった。確かにＧＨＱのお膝元。アメリカへの反抗としてとがめられないものか心配になったらしい。

日比谷のＭＰ（米陸軍の憲兵）本部に連れて行かれた。警察官に促されてレコードを出すと、ＭＰがその場でかけた。軽快なテンポのマーチが鳴り響くと、偉い方のＭＰが鷹揚な感じで「ＯＫ」と言うのが聞こえた。外事課のお巡りさんがニコニコしながら「田中さん、いいって」。以後、朝から晩まで、レジ係が付きっきりで『軍艦マーチ』のレコードをかけるようになった。

店は繁盛し、第２号店が銀座に、３号店が日本橋、新宿伊勢丹前に４号店と、あっという間に八店舗に増えたが、どこでもこの曲をかけた。やがて「メトロ」以外にも伝染した。戦後、他地方でも『軍艦マーチ』をかけた店はあったようだが、有楽町が大きな震源地だったことは間違いなかろう。

広く『軍艦マーチ』として知られるこの曲の元になったのは、１８９３年（明治２６年）発行の「小学校唱歌」に載る『軍艦』。鳥山啓の詞に、山田源一郎作曲による唱歌風の曲がついていた。

その鳥山の詞に、『美しき天然』の作曲者・田中穂積軍楽長の勧めで、瀬戸口藤吉軍楽師が１８９７年ごろ、海軍軍歌『軍艦』を作曲。その後、瀬戸口はトリオ（中間部）に『海ゆかば』のメロディーを使った行進曲にした。『海ゆかば』と言っても、信時潔作で大戦中に盛んに歌われた例の曲とは別で、大伴家持作歌の詞も一部異なっている。こちらの『海ゆかば』は、東儀季芳による雅楽風の旋律をアレンジしたもので、メロディーの雰囲気から、『君が代』を編曲したものと勘違いされることもある。

瀬戸口の曲の楽譜の出版時のタイトルなどに従い、『軍艦行進曲』と表記されることが多いが、鳥山の『軍艦』も『海ゆかば』も含めた全体の名としては「行進曲『軍艦』」と

呼ぶのが最も適切とする専門家の見方もある。
「パチンコ屋のテーマソングじゃないぞ」と批判する者。「アメリカの目の前でよくやったじゃないか」と褒める者。かつての軍人仲間の声は二通りだった。いずれにせよ、勝ち戦の時にかかった曲が、敗戦後も聴かれるようになった。田中も「許可したアメリカは偉い。大したものだ」と考える。
パチンコ店は数年でやめた。「もっと社会に貢献できるものはないか」との考えから、４０年以上前には珍しかった年中無休、２４時間営業の和風レストランの経営に乗り出した。いつでも食事ができるのも平和ならでは。戦友も年々減ってきた中、自分はまだ現役の社長業に励んでいる。
「やっぱり戦争はやだね。長生きすればするほどやだ、そう思うよ」

以上原文のまま掲載したが、我々が日頃無頓着に扱っている「軍艦行進曲」（軍艦マーチ）にも紆余曲折、諸説粉々があることを雑学として知っておくのも無駄ではないだろう。

（下）につづく